



2009 年 (平成 21 年)
12 月号 (No. 775)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

皇太子さまをお迎えして	
平成21年度年次晩餐会開く	1
探検的要素が大きかったタシ・カン登頂	6
登山界はいま——③国際交流	7
東西南北	8
高頭祭と山古志の科学探索	
支部だより	9
福島支部／山梨支部／千葉支部	
活動報告	12
資料映像委員会／図書委員会／	
集会委員会	
図書紹介	14
図書受入報告	15
追悼 松丸秀夫氏	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
山の博物館訪問	19
早池峰山岳博物館	
新入会員	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時
年末年始休室 12月29日～1月5日

皇太子さまをお迎えして 平成21年度年次晩餐会開く 支部会員も積極参加

高橋重之

平成21年度の年次晩餐会が、12月5日開催された。2年続けて皇太子さまも出席され、全国から多くの会員が集まった。若い会員たちの海外登山での活動報告や、「花」をテーマにした展示会など、例年どおりの賑やかな催しとなった。会報編集委員会の高橋委員に、今年の年次晩餐会を報告してもらった。

■ 478 人が出席

平成21年度年次晩餐会は12月5日、東京・品川のグランドプリンスホテル新高輪大宴会場「飛天」で開催された。皇太子さまがお忙しい公務のなか、昨年に続いて出席されたのははじめ、478人の会員が集い、なごやかに歓談した。

来賓として崔弘健・韓国山岳会会長をお招きした。

会場が、これまでの国際館パミール「北辰」から、ひととき大きな大宴会場「飛天」に変わった。4年前、ここで創立100周年の記念式典・祝賀晩餐会を行なった。豪華に輝くシャンデリアに目を奪

われる。テーブルには、いつものように「富士山」、「北岳」などの山名がつけられている。皇太子さまは、「富士山」のテーブルにつかれた。

■ 会長あいさつ 4つのプロジェクト



会長として初めての晩餐会であいさつする尾上昇会長

尾上昇会長は、会長として初めての晩餐会を迎えた。皇太子さまをお迎えできたことを喜び、続いて日本山岳会の現状について次のように報告した。

一・日本山岳会は実に多くの課題をかかえている。若い会員が少ない。とともに会員の高齢化が進んでいる。以前から言われてきたことだが、解決のメドはついていない。会の力が衰え、放置すれば会が消滅しかねない。若い人たちに魅力ある会にしなければならぬ。かつて山岳界をリードしてきたリーダーシップを再生・復権していきたい。

一・4つのプロジェクトチームを立ち上げた。ひとつは若者対策としての活動、ふたつ目は支部の活性化、3つ目は法人改革の検討、

4つ目のプロジェクトは「山の日」の制定運動だ。法人改革の選択肢はふたつ。一般法人を選ぶか、公益法人を選ぶかだ。解散という選択肢はあるわけがない。いずれも茨の道である。4つのプロジェクトは、既存の委員会と連携を取り合って動いている。

一・うれしいニュースがあった。日中韓の合同登山に多数の若者が参加した。東京、大阪、名古屋で若い人たちの台頭のきざしを感じる。みんなの力添えで再生と復権を成し遂げたい。ご協力いただきたい。

■新名譽会員に宮下前会長

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は48人。中村テル、松丸秀夫、川喜田二郎、蔡禮榮の名譽会員4人が逝去された。心からご冥福をお祈りしたい。

新名譽会員が紹介された。前会長の宮下秀樹会員である。尾上会長が名譽会員章を手渡した。宮下名譽会員は「夢にも思わなかった名譽会員である。先輩からは、多くのことを指導いただいた。思い出すことは1980年、チョモラ

ンマ登山に参加したことだ。北壁初登攀に成功したものの、隊員ひとりを亡くした。責任を感じ、西堀会長に退会届を郵送した。帰国すると、帝国ホテルに呼び出された。西堀会長は退会届を破って燃やした。受け取られていたら、今日の私はなかった」などと話された。

■新永年会員、60人にのぼる

新しい永年会員は60人。この3年間は34→36人で推移していた。いっきよに増加したことになる。1959年4月から翌年3月までに入会し、以降継続して50年間、会員として活躍された。会員番号は4852から5057である。56年に日本山岳会隊がマナスルに初登頂したときの興奮が、なお残っていた。山にあこがれた若者たちは競って日本山岳会の会員となった。31人が出席し、尾上会長から永年会員章が手渡された。

新永年会員

小椋凱夫、仲徳二、長岩嘉悦、安藤武俊、松村潤、円満字正和、森田暁、原田之幹、伊藤義雄、中沢仁、松方峰雄、町田悌、藤本三樹雄、西川元夫、飯田誠、西関良光、岩佐吉雄、竹村元作、岡田博司、



皇太子さまも加わって恒例の鏡開き

大熊良幸、木本芳、山浦源太郎、寺阪元雄、松永敏郎、馬場猛、高田誠、鈴木耕治、塚本幸子、野萩守、中村元次郎、深瀬一男、中村義、村石幸彦、関口周也、森山久夫、織田沢美知子、中野和郎、浅輪幸久、三輪利雄、田中外治、細川沙多子、川俣俊一、宗實慶子、笠井篤、茨木弘、羽賀一蔵、桜井昭吉、川井耿子、日本伸、照内豊、勝田房治、大久保泰司、坂井厚、荒木正弘、広谷光一郎、川勝弘一、近藤哲也、油谷次康、笹川和男、本田文雄

■馬場会員に秩父宮記念山岳賞

第11回秩父宮記念山岳賞は、『ヒマラヤ登山記録集成 日本人の天

空に輝く軌跡・全2巻』を出版された馬場勝嘉さんに決まった。表彰式が行なわれた。馬場さんは「こんな立派な賞をいただき光栄です。感謝申し上げます。多々欠点があると思います。ご教示ください」と控えめな言葉で喜びを表現した。

出版のいきさつが『山岳』(103号)に紹介されている。日本山岳会創立100周年記念の一環として企画されたという。馬場さんは、以前から山岳資料を収集されていて、『山岳』にヒマラヤ登山年賦を掲載されたこともある。百年史編纂委員になっていただいた。データベースは期日までに完成できなかつたが、馬場さんは「多くの方から協力いただいたのだから」と、全2巻にまとめ出版された。80歳を超す高齢ながら、パソコンを新調して最後は独力で入力された。東部ヒマラヤからカラコルム、パミールなど山名別に登山記録と文献が詳述されており、海外からも「BABAクロニクル」として注目されているという。

■新入会員は104人

続いて新入会員の紹介。今年は

104人が新しく会員に加わった。うち17人が出席。代表して山田弘会員(東海支部)があいさつした。

山田会員は63歳。11歳で視力をなくす不幸に見舞われた。20歳ごろから登山を始め、白い杖を片手に富士山、北アルプス、南アルプスなどに登った。「目に障害を持つ身でありながら、一般の人と分け隔てることなく迎えていただいた。山を愛する人に悪い人はいない。山を愛する心は、人を愛する心につながる」などと話した(下記参照)。

恒例の鏡開きは、皇太子さま、尾上会長のほか宮下・新名譽会員、秩父宮記念山岳賞を受賞した馬場会員、新永年会員を代表して小椋凱夫会員、韓国からお招きした崔・韓国山岳会会長の6人で行なった。皇太子さまは、今年1月の会報『山』に鏡割りを「昨年、初めて体験した」と書いていただいた。2回目の体験である。お酒は故・今西壽雄元会長の夫人から寄贈のあった「四海王」。いつもながら、感謝したいと思う。

田中文男会員(日本山岳協会会長)の音頭で乾杯し会食が始まった。メニューは、アルプス山脈に

新入会員代表・山田弘さんのあいさつ

新入会員を代表して山田弘さんにひと言ごあいさつしていただきます。山田さんは現在63歳、東海支部で活動しています。一昨年、東海支部のボランティア活動で実施した視覚障害者支援登山をきっかけに入会いたしました。11歳で視力をなくしたのち20歳ごろから登山を始めました。白杖を片手に、富士山、北アルプス、南アルプス、中央アルプス、八ヶ岳、白山などに登山、東海道や熊野古道伊勢路コース踏査など健常者以上の活動をしています。今後の抱負として、百名山登頂やヒマラヤ登山も夢見ていることです。では、どうぞよろしくお願いします。

このような晴れがましい場所でごあいさつさせていただくこと身に余る光栄と存じております。まず始めに、目に障害のある私を一

社団法人 日本山岳会 年次晚餐



新入会員を代表してあいさつする山田弘会員

般会員と分け隔てなく受け入れて下さいました伝統あるこの日本山岳会の皆様に心より感謝申し上げます。山を愛する人には悪い人はいないと言いますが山を愛する心、自然を愛する心は人を愛する心に繋がるものがあるのではないのでしょうか。

私が山を登り始めたのは20歳を過ぎてからです。それまでは私は障害者ということで両親や兄弟に見守られてきた生活を送ってきました。しかし20歳を過ぎ、私にも自立の心が芽生えてきました。

そして友人に誘われて初めて登った鈴鹿の山の鮮やかな印象は今でも忘れられません。大げさな言い方かもしれませんが、その感動が、今の私を作ってくれたものと信じていま

す。

新鮮な木々の香り、川を流れる水音、鳥のさえずり、そしてマイナスイオンに満ちた新鮮な空気は、決して目だけで味あえるものではありません。

私にとってそれは目に代わる体全体の感覚を研ぎ澄まして感じられる山の魅力なのです。そしてそれ以上に、山は私にとって私の軟弱な心と体を鍛えてくれた人生の恩師なのです。人生において大きな障害を背負った私たちにとって、山は困難に立ち向かう不屈の精神と強靱な体力を養うためには絶好のシチュエーションだと思っています。

また山は人の温もりをよく伝えてくれます。私の前を歩く人のザックの動きからはその人の足の位置、高低、左右の動きだけでなく、その人の温かな思いやりが伝わってくるのです。

60歳を超えた私の登山の未来は決して長いものではありませんが、多くの皆様のお力添えを借りながら皆様とともに楽しい山をやっていきたいと思えます。今後ともよろしく願います。ありがとうございます。

見立てたという前菜から始まり、山の恵み、モン・ブラン仕立て、紅浅間、剣岳の雪解けと進んだ。シエフからのメッセージが添えてあった。コーヒーはキリマンジャロ、パンは富士のミネラルでつくったそうだ。「四海王」に加え、古屋学而・山梨支部長差し入れの「ハラモワイン」もテーブルを飾った。さまざまな山の恵みに、芳醇な香りがよく合った。

会食をはさんで全国28支部会員の紹介があった。支部活性化が叫ばれ、28の支部はそれぞれに動きが活発だ。参加者は紹介されるたびに立ち上がりハンカチを振った。恒例のイベントだ。一昨年設立の栃木、茨城、千葉に大きな声援が送られた。さらに東京多摩、埼玉で設立準備が進んでいる。手元の晩餐会出席者名簿を数えると、参加した支部会員は218人と全体の46%を占めている。この割合は、来年はもっと高くなるだろう。

■海外登山報告会 学生部・パンボチエー峰など

晩餐会に先立ち、午後2時30分から、2階「白鳳」の間で、海外登山報告会があった。いずれも日

本山岳会海外登山基金の助成金を得て実施されたものだ。スライドから登山隊の現地での苦難・喜びが伝わり、参加者の感動を誘った。報告会には、皇太子さまも参加された。

日本山岳会学生部・パンボチエー峰登山隊（報告者・蔵本悠介隊長、中塚大佑隊長）

とにかく現役学生のみで、かつ未踏峰に挑戦したいという意気込みだった。全国の大学山岳部に呼びかけた。参加したのは中央、関西学院、同志社、上智からの6人。目標をネパール・マナスル山群の未踏峰とした。パンボチエー峰（6620^{メートル}）は、登頂を断念したが、サムドピーク（6335^{メートル}）には初登頂に成功した。

8月19日、出国。飛行機を乗り継ぎカトマンズへ。大渋滞に巻き込まれながら距離を延ばし9月2日、草原のなかにベースキャンプを設営。サムドピークへの登頂に成功したあと28日、パンボチエー峰にアタックした。頂上直下120^{メートル}まで進んだが、もろい岩と雪のナイフリッジにはばまれた。蔵本隊長は「チベット側の山々



大宴会場「飛天」で開催された祝賀晩餐会

が美しかった。人が初めて見る風景だと思った。人が初めて歩く雪面だった。しっかりと、まぶたに焼き付いている。マナスルが見えた。感動した」などと語った。10月16日、帰国。

神戸大学・中国地質大学合同カンリガルポ山群学術登山隊（報告者・井上達男日本側隊長）

東チベットに位置するカンリガルポ山群は、東南に約280^{キロ}にもおよぶ山脈を構成して、30座を超す6000^{メートル}級の峰のすべてが未踏峰のまま残されていた。今年11月5日、神戸大学・中国地質大学合同登山隊は、KG12（三姉妹峰中央峰）への初登頂に成功した。

登山隊は日本側7人、中国側10人で構成した。

最初に登ったのはチベット人学生2人。高所に慣れていない日本隊は、さらにC3を設営して翌々日、初登頂に成功した。

この山群は未開放地域で、詳細な地図は公開されていないし、測量も許されていない。KG12は旧ソ連の地図では6708^{メートル}となっているが、頂上で、GPSは6805^{メートル}を示していた。

井上日本側隊長は「山には、まだ名前がない。現地で白い鳥の峰と言う人もいたが、あいまいだった。現地の呼び名を優先して命名し中国登山協会に提案したい」と語った。

信州大学学士山岳会（報告者・田辺治隊長）

信州大学・信州大学学士山岳会が創立60周年を迎えた。その記念事業の一環として、ネパール・ヒマラヤのペリヒマール山域で、まだ登っていないピークに挑戦することにした。この地域では、過去にギャジカンなど7000^{メートル}級の未踏峰に初登頂している。目標のひとつにネムジュン（7139^{メートル}）



海外登山報告会も満員の盛況だった

北西壁の初登攀を設定した。

田辺隊長は「これまででは大がかりな極地法をとったため、経済的にいささか背伸びをした。今回は身の丈にあった登山を考え、完全なアルパイン・スタイルで行ないたいと思った」と語った。

アルパイン・スタイルは、登る人の力を重視して登る。ベースキャンプを出ると、あとは一気に登る。固定ロープなどは使わない。

10月27日、ネムジュン北西壁までの長いアプローチを開始した。ベースキャンプから約12^キ、標高差1200^{メートル}。2日かけてのアプローチだ。予備日を入れて6日分の食糧と燃料、それに登攀装備などを含めると、出発時の重量は各自

20^キ以上となった。

アイスクリューで支点を作り、じりじりと登った。安定した氷雪壁ではあったものの、傾斜が強く壁も大きく感じた。上部に上がるほど氷が硬く、傾斜もさらに増した。暗くなったあと、月明かりに助けられ、疲れた体で稜線を削ってなんとかテントを張ることができた。

30日は5時に起きて準備を始めた。最低限の装備で頂上に向かった。頂上に近づくにつれヒマラヤ巒が顕著になり、そこをトラバースしながらの登攀だった。頂上への稜線は巨大な雪庇が続いていた。どこが頂上か確認できず、見た目で一番高い場所を頂上とした。記念写真だけ撮って、緊張の下山を開始した。

■展示会「支部おすすめの花の山」

レセプションホールで展示会があった。正面を飾ったのは、皇太子さまの写真「雲表の稜線を行く」だ。説明によると、平成2年7月、皇太子さまが甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳に登られた時に撮影された。デジタル処理で甦らせたものだという。「的確な視点で登山者の点描と

背景に駒ヶ岳を写し、見事に“絵”としてまとめられた」とあった。

皇太子さまは甲斐駒ヶ岳に黒戸尾根から登られた。日本で三大尾根のひとつとされる長い尾根だ。標高差2200^{メートル}。尾白川沿いの登山口には、その登山碑が立っている。登山碑を前に、だれもが皇太子さまの脚力に驚くことだろう。

展示会にはアルパインフォトクラブによる山岳写真、またアルパインスケッチクラブによる水彩画が展示されていた。スケッチクラブは会員62人。来年2月に設立20周年を迎えるそうだ。

支部から「支部おすすめの花の山」が展示された。北海道支部の夕張岳、山形支部の鳥海山、関西支部の六甲山……。信濃支部は、徳本峠を選んだ。それぞれに山を彩る花を紹介していた。エーデルワイスクラブは、20年にわたって撮影してきた写真「ヒマラヤの青いケシ」を展示。支部、同好会、同期会は、それぞれに山岳書籍、文献、地域活動報告などを展示・販売した。

■好天に恵まれ千葉・鋸山へ

翌日の懇親山行は集会委員会が

主催し、千葉・鋸山で行なった。晚餐会は小雨だったが、翌日は打って変わっての好天に恵まれ、参加者は100人近くにもなった。JR品川駅前に集合。午前8時、2台のバスを連ね、海ほたるを経由して鋸山に向かった。東京湾の向こうに富士山が大きく見えた。青空を背景にした真っ白な勇姿が目についた。暖かい日だまりのなか、日本寺の大仏さまに見守られながら昼食をとり、千葉支部の応援を得て用意された豚汁を楽しんだ。

(写真)萩原浩司、北原孝浩

クロニクル

探検的要素が大きかったタシ・カン登頂

南井英弘

昨年に続きこの秋も単独でネパール入りした。9月13日、カトマンズからジープでポカラ経由、ベニに到着。カリ・ガンダキ川沿いに登山基地となるマルファ村まで車で入ることができ大いに助かった。

16日に入山してから毎日、標高差が1000^{メートル}を越す登りであったが、高所順応がうまくでき、予定より1日早い19日に目的のタシ・カン山麓にBCを設営した。翌20日は休養する。ちょうどこの日は私の74歳の誕生日だった。

次の日から登頂の準備に入る。シェルパ2人と一緒にルート偵察と開拓で、登頂できる確信を得た。22日、彼らとともにタシ・カンI峰とII峰間の鞍部から東に流れ、途中でII峰の基部沿いに南に流れ下る氷河の舌端部から氷河上を終日遡行した。数箇所ロープがほしいが、彼らとコンティニュアスで登り続けてI峰とII峰の鞍部近くまで出た。鞍部や稜線上は風が強^く、50^{メートル}ほど戻って比較的傾斜の

緩い斜面にキャンプを設営し、明日のアタックに備えた。

23日、無風快晴で絶好の夜明けを迎えた。朝食後、互いにハーネスにロープを結び、3人でタシ・カン南稜の末端に出た。稜線の西面は氷雪の急斜面であり、稜線には大きな雪庇が頂上まで続いているのが観察された。前日の偵察でも、この発達した雪庇の東側に回廊のような雪面が続いているのを確認している。これらの雪庇は太いツララなど氷の柱が支えているように見え、また最近雪庇が崩壊したような痕も見られない。急斜面の稜線を雪崩の発生やスリップ事故を心配し、雪庇の崩壊や踏み抜きに神経をすり減らしながら登頂するより、この回廊の方が登降ルートとして安全と判断した。回廊の中ほどから全長で600^{メートル}のフィックス・ロープをセットしたが、頂上200^{メートル}ほど手前でロープを使い果たし、3人のコンティニュアスで安全を確保しながら



タシ・カン頂上直下、大きな雪庇の右下を登降した（左奥が頂上）

ら登った。回廊は狭くなりついになくなった。キャップ状の氷雪の塊に登りきると、そこが雪庇の上の頂上そのものだった。

頂上の雪庇の崩壊、陥没の危険性もありシェルパと交代で頂上に立った。頂上からマナスル、P29、ヒマール・チュリ、その手前に昨年登ったチュール山塊、アンナプルナの峰々、マチャブチャレなど白いヒマラヤの峰々が輝いていた。左側がすっぱりと切れ落ちた登路を慎重に下山し、途中でアタックキャンプを撤収し重荷を背負いながら、氷河末端部まで辿り着いた。BCに待機していたコックとアシスタントの出迎えを受けて、

やつと重荷から解放された。登山道はマルファ村から50^{メートル}も登ると住居もなく、カルカには牧童もいない。まさに人里遠く離れ、登山者にも忘れられた山塊だ。

カトマンズ入りしてすぐにエリザベス・ホーリーさんのインタビュウを受けた。彼女によると「タシ・カン峰は2002年の初登頂以来4登されている。05年フランス隊と06年スイス隊では1人が死亡。06年フランス隊は山塊に辿り着けず、同年ドイツ隊は登頂に失敗している。気をつけて登山をするように」と、アドバイスがあった。下山後のインタビュウでは「よくぞ登った！ おめでとう」と喜んでくれた。

短期間で登頂に成功した要因は、登山期間中、連日好天に恵まれ、高所順応が順調にでき、BCをI峰に最も近い氷河舌端部近くに設営できたことなどがあげられる。

ダンブス峠からヒドン・バレーに下る所からトレースもなく、ケルンもまったくないなど探検的要素が大きく、経験を頼りにシェルパと協議しながら入山ルートを決め、BCを設営した。シェルパの協力を得た充実した登山だった。

レポート

登山界はいま――

③ 国際交流

神崎忠男

登山に国際的な連携が必要かどうか。疑問に思う人もあろうし、無関心または余計なこととか受け止められていない現状も伝わってくる。日本山岳協会(日山協)の一員として国際山岳連盟(U I A A)に携わり、アジア山岳連盟の設立にも関わったものとして経緯と現状を報告し、ご理解を得たい。

ヨーロッパの国々を中心にU I A Aが発足したのは1932年。日本の加盟は1967年である。マナスル初登頂など戦後のヒマラヤ登山に実績を積み上げてきた日本をドイツ山岳会が誘った。東アジアでは初めての加盟国である。

その後、日本山岳会と日本山岳協会との話し合いで、国際窓口は日山協が受け持つことになり、今日に至っている。

私が初めて国際山岳連盟の会議に出席したのは1986年、ミュンヘンで開かれた理事会からで、世界的な自然保護運動のうねりのなかで、登山界でも山岳自然環境

問題への取り組みが盛り上がりはじめた時代である。

このころU I A Aの会合などでよく聞いたのは、日本からは海外登山隊がたくさん出されるが国際貢献、国際交流には影響力を感じないという指摘である。悪気がある口にはしていない。感じたままを口にしてみれば思い当たるフシがあり、その場を繕うばかりだった。

その後1990年代に入るとスポーツクライミングが盛んになり、世界各国でワールドカップ大会が開催されるようになった。オリンピックの競技種目に参入という目標も出てきた。世界的な普及がなければ、国際オリンピック委員会への認可は下りない。そこで、WC大会の各国での開催に力を入れ、アジア、南米、アフリカなどの諸国に参加を呼びかけた。

日本はアジア地区での開催、普及の先進国としての役割を受け持

った。1991年スポーツクライミング・ワールドカップ東京大会がアジア地域で初めて東京・代々木公園で開催された。参加人数を気にしながらの開催だったが、外国選手約70名、日本選手約30名が集まり、充実した大会となった。

U I A Aの加盟国、加盟団体が増え、およそ80カ国、100近い団体が加盟登録していたこともある。しかし、スポーツクライミングだけが目的で出来た組織も多く、アルプス、ヒマラヤ登山などの実績をもつ古からの山岳組織と考え方に隔たりが感じられることもある。最近では影響力の強いドイツなど離脱する国がいくつかあり、憂慮されている。

日本は当時、16の理事国のなかのひとつであった。理事国の責務を果たせとばかり、多くの国からU I A A総会の日本開催の要望が出された。当時の日山協・鎌田会長からは金がかかる厄介なことは引き受けてくるなど強く言い置きされていたが、国際的圧力には抗しきれず、1992年秋、松本市での総会開催となった。

神戸ではスポーツクライミング、ワールドカップ大会が同時開催さ

れた。1年前にはH A T T Jがヒラリー卿やボニントン、メスナーを呼んで国際山岳環境シンポジウムを開催しており、日本の国際株が上がった。

アジアがひとつにまとまろうという動きはU I A A松本総会を機に高まった。韓国、ネパール、パキスタン、イランなどはアジア山岳連盟(U A A A)の早期設立を強く主張した。日本(日山協)は「消極的」というより「不要」の立場をとったが、中国までが設立を迫り、1994年秋、ソウルでの設立総会では、結果として日本が初代会長と事務局を受けさせられてスタートした。活動は継続しているが、いまひとつ盛り上がり

に欠ける印象をぬぐいきれない。国際交流、国際理解は差し迫って重要な問題ではないかもしれない。しかし、疎かにしてはならない課題のひとつだと、私は考えている。情報を交換し、互いに刺激しあい、登山の楽しさを共有することで世界が結ばれる。その意味は重い。J A Cを代表する形で、私が日山協の副会長になっている理由のひとつは国際交流面での役割にあると認識している。

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

高頭祭と山古志の科学探索

石岡慎介、鈴木恭一郎

第52回「高頭祭」を主催する越後支部の誘いに、科学委員有志が中心になって首都圏、山梨の岳人16人が参加した。7月25日の式典には、宮下秀樹前会長、堂本曉子評議員、山梨文学館の近藤信行館長、山梨支部の古屋支部長ほか3名も駆けつけられ、第二代会長高頭仁兵衛翁の威徳を偲び交流することになった。

霊峰「弥彦山」の中腹に建立された高頭翁の寿像碑前には県内十数団体の岳人が集まった。弥彦神社の燈籠神事に協賛して「第56回弥彦山たいまつ登山祭」として、山を愛する新潟県岳人ならではの意気込みである。

宮下氏は越後支部90周年祭の参

列を回顧しながら、越後の銘酒やマナスル登攀の食料担当の思い出を語り、山岳会の現状課題にも言及された。

堂本氏は山河が健康維持の源であり、「山に登っていたから知事になれた」とユーモアを交え、山に対する価値観が多様化しても、先人の足跡を脈々と受け継ぐ支部伝統の強さを讃えられた。「山々を、山の会を、そして祭りの文化を大切にして下さい」と結ばれた。

夕食も早々に弥彦神社に向かった。奥社からの隊列に合流して参道を下り、岳人が掲げる300本ほどの松明が杉巨木の鎮守の森を輝かせ、打ち上げ会場へ行進する。鼓笛隊、燃え盛る松明に花火の爆音が轟きわたり、山と人がひとつになる火の神事である。村民から拍手が沸き起こり、「おやひこさん」に手を合わせる年配者もいる。昔は雨乞いとか、豊作祈願、神恩

感謝の祭りであったが、今や高頭翁が神の先導師となり県内外の岳人を従えて行列の先頭にあった。10時には宿に戻り、越後銘酒と甲州ワインで慰労会となった。

翌朝8時から、「越後山脈の生因と中越地震発生メカニズム」と題して、東大地震研の額綱・大木両先生が10枚ほどのスライドで講演された。大木先生による入門編は、地震学徒となられた経緯に触れながら、ひずみが蓄積される地震大国の逃げられないテクトニクス構造を解説し、余震の恐怖に言及された。新潟、岩手、宮城などの過去の震源断層の大きさを首都圏にプロットし、その大きさに実感を持たせ、世界地震の10割は日本で起きることから「備えた者が勝ち」「今すぐ出来ること」など、日ごろの心構えを力説された。

額綱教授は「地震を学ぶには山の科学を知ろう」の立場から、越後山塊がいかに褶曲地形になっているか、ひずみの集中帯として多発する中部特有の構造を実測データから解説された。新潟県の地質に特有な液状化現象が起きやすい状況での災害対策にも触れられた。

9時半から4年前の被災地山古

志村を新潟大の卜部先生の先導でフィールドワーク。震源13^キ、規模M6・8が及ぼした斜面崩壊、集落水没、地すべりと堰止めの現場を案内してもらった。海底に堆積された砂と泥の堆積岩の弱い地表に再び棚田の日本美が甦り「父祖の地なれば、住み継げり」と帰村した人々の郷土愛を知る。

復興後にも山古志を訪ねられ、平安に戻った大地の営み、力を讃える皇后様の御歌を前に自然への祈りを新たにしたい。

「かの綱^{なほ}の四年^{よとせ}を経たる山古志に牛らは直^{なほ}く角を合^あわせる」

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

福島支部

第25回全国支部懇談会

10月25・26日、第25回全国支部懇談会が猪苗代町で福島支部主管により開催された。

本部から尾上会長、神崎・藤本副会長をお迎えし、首都圏と21支部を含めて147人が参加した。

25日の開会にあたり、大谷福島支部長が歓迎のあいさつを述べ、猪苗代町町長・津金要雄氏からは祝辞をいただいた。

続いて磐梯山噴火記念館の副館長・佐藤公氏による「磐梯山とジオパーク」と題した講演があった。磐梯山噴火の歴史やジオパークの活動などを中心とした講演で、小磐梯が吹き飛んだといわれる1888年の噴火の話は、翌日に登山が予定されているだけに興味を誘ったようだ。スクリーンに映された凄まじい噴火の絵は、画家の大



尾上会長も加わって懇親会は盛り上がった

下藤次郎が描いたもので、宮内庁に献上されているとのことである。また、大下の描いた穂高らしき絵は『山岳』第三年二号の表紙になっているとのこと。その磐梯山の絵と『山岳』の表紙が並んで映されるという意外な展開も印象に残った。

懇親会では始めに尾上会長からあいさつをいただいた。「公益法人

の新制度移行への対応」、「会員の高齢化と若年会員の増強」など、直面する課題の現状と対策などに関わる話であった。いずれも会員一人ひとりが重要性を認識して真剣に取り組むべき事項であり、参加者は強い関心をもって聞き入った。

交流の宴は高橋宮城支部長の乾杯の音頭で始められた。まもなく宮崎支部が17名で延岡の伝統芸能「ばんば踊り」を披露すると、他の支部も次々と壇上にあがって歌い、尾上会長も加わっての合唱もあった。最後は『四季の歌』を全員で肩を組んで熱唱、そして佐藤山形支部長の中締めによって閉会とした。

翌26日、秋雨前線が北上して雨の朝を迎えたが、予定通り記念行事を行なった。観光班は、中津川の黒滑八丁や五色沼自然遊歩道で紅葉を觀賞した。

磐梯山登山班は、風雨が強まったため、山頂手前の弘法清水から八方台に引き返した。

一方、猫魔ヶ岳登山班は、山頂を経て雄子沢へ下山した。下るにつれてカエデの紅葉が見ごろを迎えており、雨霧が落ち着いた情景

を演出してくれたため、まずまずの登山になった。しかしながら、それぞれの山頂から飯豊山や吾妻山などの名峰をこぎ上っただけだったことが心残りである。

多くの皆さまに参加していただき、福島支部の会員一同から感謝している。
(逸見征勝)

山梨支部

第50回木暮祭

10月17、18の両日、金峰山麓の金山平で第50回木暮祭を開催した。

「奥秩父の父」と呼ばれ、奥秩父の魅力を紹介した木暮理太郎・日本山岳会第三代会長を顕彰する木暮祭も今年で50年。木暮家の関係者、生地・群馬県太田市の強戸山岳会、首都圏・越後・静岡・東海支部の関係者ら約120人が参加し、翁の業績をしのいだ。

顕彰は昭和25年に始まった。翁が愛した金峰山が見える場所として金山平が選ばれ、7回忌に当たる同年、翁ゆかりの石楠花山岳会や霧の旅会、日本山岳会、山梨の岳人などが、現在の場所より上方の岩にレリーフを取り付け、命日の5月に碑前祭を開いてきた。しかし、昭和34年の台風で一帯が荒



強戸山岳会会長・服部佳郎氏によるあいさつと献杯

れたため現在地に再建。翌35年10月に第1回木暮祭を開催し、地元の木暮碑委員会（日本山岳会山梨支部、山梨県山岳連盟、増富ラジウム峽観光協会で構成）の主催で継続し、現在に至っている。5月の碑前祭を加えると60回目となる。50回目の今年は、盛大にやろうと計画。全国の支部のほか、太田市などにも呼びかけた。太田市の関係者を通して木暮家の関係者にも依頼した。情報を知った東京の市村孝史さんからは、第1回の様子を収めた8ミリ映像のDVD、芳野菊子さんからは古い写真が寄せられた。

また山梨支部は記念の手ぬぐいと冊子、強戸山岳会も冊子を準備して配布した。DVDは前夜祭で上映。地元の山梨日日新聞、山梨放送が「50年前の映像見つかる」と報道し、関心が高まった。

前夜祭の17日は、みずがき山リーゼンヒュッテに約60人が集合。古屋支部長、太田市の深澤長平強戸山岳会前会長があいさつ。太田市の浅海崇夫さんが「理太郎の故郷は今（太田市から見える山々）」と題して、誕生地から見た木暮翁を、八巻恭介木暮碑委員長が「木暮碑建設のころ」と題して山梨側の顕彰の様子を話した。さらに木暮家の参加者を代表して、生家を守る木暮英雄さんがあいさつ。市村さんが映像の経過を解説し、上映した。また芳野さん提供の写真パネルにして展示した。この後、夕食をとりながら懇親会を開き、参加者が交流を深めた。

完食となる人気だった。

13時から碑前で木暮祭を行なった。八巻木暮碑委員長、山梨県山岳連盟の秋山泉会長、古屋山梨支部長が主催者としてあいさつ。翁の業績や木暮祭の50年を振り返り、今後も顕彰していくことを誓った。木暮英雄さんが親族を代表してお礼のあいさつの後、持参した供物を供えた。山梨岳連の献酒に続き、参加者120人がバラの花を一人ひとり献花した。さらに強戸山岳会の服部佳郎会長の音頭で献杯し、山梨支部の久保田明宗副支部長のあいさつで閉会した。

当日は秋晴れの青空に金峰山がくつきり、どっしりとした姿を見せ、金山平の紅葉とあいまって絶好の日和となった。50年前、草原の斜面にシラカバが点在し、金峰山が見渡せた顕彰碑は、成長したシラカバとカラマツの斜面に変わって金峰山は望むことができず、時の流れを感じさせた。しかし西洋流の登山思想が全盛の時代に、古くから続く日本的登山を奥秩父で実践した木暮理太郎の業績は、現在につながっている。若い女性の登山ブームの背景には、山に安らぎを求めた木暮翁や田部重治の

登山観が脈打っていると考えられるからだ。『秩父派』の思想は受け継がれているのである。

山梨支部員一同、この節目の木暮祭にかかわれたことに大きな喜びを感じるとともに、遠路参加いただいた木暮家の関係者、群馬県太田市の強戸山岳会、本部の神崎忠男副会長、越後支部の山崎幸和支部長ら新潟、静岡、東海、首都圏の皆様、資料を提供していただいた方々に感謝申し上げます。

（深沢健三）

千葉支部

房総半島分水嶺踏査

千葉県房総半島には、高さこそや小振りであるが豊かな生物多様性と文化をはぐくむ魅力的な山が少なくない。千葉支部は2007年6月の支部発足以来、これらの山々のよさを再発見する山行を重ねてきた。房総の山々は、半島を南北に縦断し千葉の背骨として太平洋と東京湾に水を分ける分水嶺でもある。支部発足3年目を迎え、当初からあためていた企画であるこの分水嶺踏査を開始することとなった。

房総の山は高度が低いことから正確な分水嶺の確定が難しく、地図上の線引きに当たっては星野由尚茨城支部長(元国土地理院長)のお力を借りた。最南端館山市州崎から長柄町六地藏まで約100キロ、調べた範囲では、まだ歩き通した人はいないようで初めての試みである。千葉は、県の最高峰が日本一低い(愛宕山408メートル)という山城であり冬でも雪が降らないことから、随所でハードなヤブ漕ぎを強いられる。あせらず1年半ないし2年間をかけて楽しみな

がらゆつくりと歩くことにする。

(篠崎 仁)

第1回踏破——長柄町六地藏から長南町笠森観音まで

10月11日、第1回の分水嶺踏破を行なった。支部会員20名、新聞報道などで応募してきた一般県民約70人を加え90名が参加した。「山の日プロジェクト」の一環と位置づけ、趣旨を書いたスリッパを配布し説明を行なった。出発に先立ち、小崎尚会員(明治大学名誉教授)より房総半島分水嶺の特徴について説明を受けた。

スタート地点の長柄町六地藏は、



房総半島分水嶺、第1回踏破が行なわれた

東京湾側の千葉市から外房の中核都市・茂原市に向かう通称「茂原街道」の長い坂道を登りつめた最高地点でもある。この六地藏から房総半島の分水嶺歩きが始まる。途中、コスモス、カントウヨメナやオミナエシが咲いていた。

クリ林の向こうに見える小高い山は、標高179メートルの「権現の森」だ。タブの自然林に覆われた山は、遠く県庁の19階にある展望ロビーからも望むことができる。下総台地が上総丘陵として盛りあがる顕著なピーク。地元の信仰も篤く、三角点のある森の中に神社が祀られていた。スズメバチが飛んでいる山頂を早々に退散し、山村の秋の景色を堪能しながら次の目的地に向かう。道は「関東ふれあいの道」と交差しながら、海上自衛隊の大きなアンテナが立つ市原通信所へと続く。「海だ、海だよ」の仲間の声に目をこらすと、臨海コンビナート群の向こうに青い海。紛れもなく東京湾だ。

洪くて深みのあるえんじ色はカキの葉だ。やぶの中にアケビがぶら下がっていた。仲間の1人がつるを引っ張って実を取ろうとしていたら、ヘビが出てきた。カラス

ウリがゆらりと揺れた。

さらに歩いて刑部の高星山に登る。「刑部」と書いて「おさかべ」と読む。大黒様を祀る古い集落のひとつ。高星山までは分水嶺の線上を歩く。やがてスタジイの巨木たちと出会った。この頂にも祠があった。東側が切り開かれ、茂原市内の町並みと太平洋が、午後3時の日を浴びて明るく見えた。暖地の存残林として国の天然記念林に指定されている笠森観音の森までは、あとひと頑張りだった。

(三木雄三)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

資料映像委員会

第13回全国山岳博物館等 連絡会議を開催

10月17日13時から17時まで、当
会集會室にて資料映像委員会主催
で開催された。

今年度参加していただいたのは、
東京都写真美術館、秩父宮記念ス
ポーツ博物館（以上東京都）、大町
山岳博物館、田淵行男記念館、松
本市山と自然博物館（以上長野県）、
富山県「立山博物館」、財団法人立
山カルデラ砂防博物館（以上富山
県）、谷川岳山岳資料館、山田昇ヒ
マラヤ資料館（以上群馬県）の計
9館9名である。

資料映像委員会からは石橋委員
長、近藤・溝口・鈴木・斉藤・中
野各委員が出席した。

会議の冒頭、今年度新しく就任
した石橋委員長よりあいさつがあ
った。あいさつでは委員会が抱え

ている問題と課題を前にして、今
後どのように活動をしていく必要
があるかを語った。さらに、専門
知識をもった方々に集まって開か
れている本会議の意義は今後もま
すます高まっていくので、ぜひ活
発な会議をお願いしたいとの内容
であった。

引き続き議事に入った。各館か
ら、本年度の活動と計画について
詳細な報告があり、館同士での自
由な質疑応答があり、出席委員か
らさまざまな意見が出され活発な
情報交換がなされた。

具体的には、「日本山岳会から資
料の寄託を受けているが、資料の
利活用について実績が少なく困っ
ている。どうしたらよいか」、「当
会議が主宰する企画展が参加館な
ど巡回展として実現できないか」
という話題が出た。

今年の会議は各館の持ち時間が
十分にあったせいか内容が濃く、



活発な情報交換がなされた全国山岳博物館等連絡会議

極めてアットホームな雰囲気の中
で行なわれた。今後とも館同士親密
な情報交換の場として設定できる
よう、委員会として取り組んでい
きたい。

（中野守久）

図書委員会

京都大学土山岳会(AACK) の歩み―第38回山岳史懇談会

10月30日、京都から平井一正・
斎藤清明両氏を招き、「AACKの
歩み」を語っていただいた。

平井さんは現在、神戸大学名誉

教授。奇しくもAACKが発足し
た1931年生まれで、AACK
と同一年だ。斎藤さんは総合地球
環境学研究所教授で、『今西錦司
―自然を求めて』などの著者。
適任者2人の、テーマを「戦前・
戦中」と「戦後」に分けたスムー
ズな連携で、AACKの歴史と個
性的な群像がスライドを使って語
られた。

AACKはもともと「AKADE-
MISCHER ALPENCLUB KIOTO」
として発足し、京都帝大以外の同
志社や京都府立医大のOBも含め
て、ヒマラヤを目指す目的で作ら
れた。中心になったのは今西錦司・
西堀栄三郎・高橋健治らだ。京都
大学山岳部との関係（AACKは
京都大学山岳部OB会ではない独
立した組織である）、並行して設立
した探検地理学会（探検へ向かう
新たな組織）やFFII生物誌研究
会（探検地理学会を解散して、戦
後に改めて復活した組織）に適宜
重点を移しながらの活動など、そ
の歩みは柔軟でなおかつ複雑だ。
それは、時代の大きな波に阻まれ
ながらも、常にヒマラヤを目指し、
新しい突破口を開こうという飽く
なき挑戦の現出だ。今西さんは先

を読んで組織を作る。ある意味で策略家です」との発言が興味深い。AACKの独特な活動は、京都という町の特異性にもよる。町の狭さがよい意味で作用しているという。どんなに遅くまで酒を飲んで計画を立てても自転車で帰れる。祇園のお茶屋など陰謀(?)をたてやすい環境もあり、祇園には学割(学者割引)もあるという発言に会場は大笑い。また、町衆文化の歴史があり、旧帝大の学生を応援しようという気風が強いという分析も納得がいく。

『雪山賛歌』が「著作権協会」に登録してあるため、著作権料が毎年AACKに支払われている。A



AACKを語る斎藤氏(左)と平井氏

AACKを社団法人にしたこともあわせて、目の付けどころがよい切れ者の先輩のお陰につきるという。会場からは、マナスル登山の移譲の舞台裏についての質問もあがった。ネパールの許可がなかなかおりず、今西の判断で決定したが、内部では「日本山岳会に移譲するんやったら、今西、お前、腹切れ!」との発言もあったという。

ほかにも、桑原武夫、加藤泰安、四手井綱英、梅棹忠夫……。まだまだ綺羅星のような名前が次々に登場するのだが、本欄では講演内容の10分の1も書ききれない。内容は『山岳』の次号に改めて掲載を予定している。(三好まき子)

集會委員会

那須三本槍岳と三斗小屋

10月17日、那須塩原に参加者19名が集合。タクシーに分乗して、沼原湿原に向かい、沼原湿原駐車場で今回案内していただく栃木支部の小島守夫氏と合流。白笹山への坂道を登り始め、南月山へと向かう。

「南月山」の読み方であるが、小島氏によると那須山一帯は、「出羽

の月山」信仰が根強く月山にちなんだ地名がついているのだそう。主峰茶臼岳に対して南の月山つまり「みなみがっさん」なのだそう。そういえば出羽の月山にある地名とよく似ている。「姥ヶ平」「牛ヶ首」……。出羽三山の膝元である酒田で生まれ育った私は、改めて山岳信仰が日本の津々浦々まで広がっていたのだと知らされた次第である。考えてみると人間が死ぬとその霊魂は深山に移り棲み、そこから常に我が子孫の繁栄を見守っていてくれるものと固く信じられてきたのだ。古代からの血が脈々と受け継がれているのではないかとさえ思った。

紅葉は最盛期を過ぎたようだった。



秋の三本槍岳が楽しめた(画・小出和子)

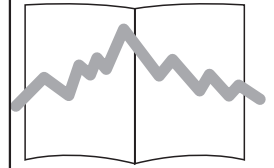
た。最盛期にはドウダンツツジの赤とクマザサの緑が錦絵のようであったであろう。足元にはツルリンドウの赤紫の実、晩生の花がそっと咲いていた。また、那須山系にはシラタマノキが多く、緑の葉っぱの中に白い実が可愛らしい。姥ヶ平ではガンコウランの実を見つけ、大喜びでその甘酸っぱい実を口にした。

三斗小屋温泉への下りは、紅葉がまだ残っていて充分楽しむことができた。柔らかな炭酸鉱泉に浸り、疲れを取ることができた。

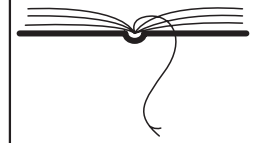
翌18日は晴天。宿からは紅葉真っ盛りの大きなカエデの木の背後に、遠く大倉山や三倉山まで遠望できた。7時出発。温泉の源泉から吹き上げる白煙を眺めながら隠居倉、熊見曾根を通り朝日岳との分岐に向かった。半分为朝日岳を、半分为三本槍を目指すことになった。朝日岳までは20分でピストン往復。清水平で先発と合流。分岐にザックを置いて、三本槍岳までもピストン往復した。左に赤面山を眺めながら長い中大倉尾根を北温泉に向かって下山した。

変化に富むコースであり楽しく参加できた。

(小出和子)



図書紹介



尾形好雄・著

『ヒマラヤ初登頂 未踏への挑戦』



2009年7月
東京新聞出版部刊
A5判 359頁
定価 2200円

「サイボーグからバージンキラーへ」と仲間から畏敬された尾形好雄の人生が凝縮された本である。

高校山岳部から社会人山岳会で山の魅力にとりつかれた著者は、24歳で初めて隊長としてツクチエ・ピークに挑んだ。数多くの報告書を読んだ私にとって、その報告書は絶賛されるべき内容のものであったが、その時代ではご多分にもれず評価は低かった。

著者はこの遠征を進めるなかで筆舌に尽くしがたい苦勞をし、そのことで以後の遠征はすべて対応できた」と述懐している。すごいこ

とだ。

収録されているヒマラヤ登山の記録一つ一つからは、著者の生きようが浮き彫りにされる氣迫を感じ、読者は知らず知らずのうちに引き込まれていくに違いない。

そのなかからいくつかを紹介しよう。

ヒマルチュリ西峰初登頂の「あの時私は隊長の立場を忘れ、1人の登山者となって頂上に惹かれていった。（中略）こっしたナロー・エスケープ（九死に一生）に救われた登山をした者にとって月日の流れが頂上での感激を遠い想い出として風化させても、慚愧の念だけは洗い流される事はない」。

ブータンのガンケル・プンスム登山では「自分の数多いヒマラヤ登山で全ルートをつたった一人で切り開いたのは、後にも先にもこの登山だけであった」。

冬期サガルマータ南西壁登頂写

真撮影では「大空をバックに旗を振るような写真は駄目で、必ず足元も入れるように心がけた」。

記録もさることながら圧巻であり、本書の価値をひとときは高くしているのが「道場としての山 登山の陥穽と喜び」の含蓄のある章である。必読を勧めたい。

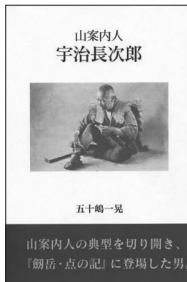
岳人は「登れて書いて話せて」一人前といわれるが、私はさらに「読めて酒が飲めて歌える」を追加する。

そのすべてを備えた、日本を代表するヒマラヤニストであり、「現代の語り部」と異名をとる著者の力作である。

（山森欣二）

五十嶋一晃・著

『山案内人 宇治長次郎』



2009年8月
桂書房刊
A5判 308頁
定価 2100円

大ヒットした映画『剣岳 点の

記』の便乗本と誤解してはいけません。長年にわたってコツコツ集めた資料をまとめた著者の渾身の書

だ。宇治長次郎と同郷の富山の旧大山村出身の著者は、長次郎の子孫や地域の古老の話をも丁寧に取り集めて、穏やかで信心深く実直なひとりの山人の姿を浮き彫りにする。

さて、映画は柴崎芳太郎と長次郎が困難を乗り越えて、剣岳の頂に立つ感動の物語に仕立ててあるが、実は柴崎芳太郎は登頂時の同行者に長次郎の名前をあげてはいないのだ。ところがその柴崎の発言のなかにも矛盾点が多いことが、剣岳の測量登山の謎をより複雑にしている。長次郎は剣岳への登山を先導し、測量のための材木を背負い上げているが、強い信仰心ゆえに、あえて頂上を踏むことをひかえたのではないかと著者はいう。しかし本書の魅力はその謎解きではない。それ以後の長次郎の軌跡を、膨大な資料の山から掘り起こしていることだ。

柴崎隊の2年後、長次郎は日本山岳会の吉田孫四郎らの剣岳登山を案内する。「長次郎の案内によって測量隊が剣岳に登頂できた」との噂が広がっていたのだ。

生まれ持った人柄のよさに、山に対する勘の鋭さ、技術の高さが

加わり、それからの彼の活躍は、まるで水を得た魚のようだ。木暮理太郎、田部重治、近藤茂吉、中村清太郎らの立山・剣岳周辺を縦横にめぐる縦走、三校山岳部の今西錦司、西堀栄三郎らの薬師岳カールの踏破、そして冠松次郎が拓く黒部の溪など、そのかたわらには常に宇治長次郎がいる。暢気に鼻歌を歌って歩く長次郎の姿を、何人もが書き残していて微笑ましい。

「近代登山の開拓期」と呼ばれるこの時代の登山のほとんどが、表舞台に現れない彼ら「山案内人」の存在なしにはあり得なかったことを実感させられる。著者が書きたかったのも、山案内人の立場から見た登山史であり、本書には当初「日本の山案内人を伴う主な登山」リストを附属資料として掲載予定だったという。発表されれば、近代登山史は、今までとまったく違った側面を見せることだろう。

(三好まき子)

小泉武栄・著

『日本の山と高山植物』



2009年9月
平凡社刊
新書判 238頁
定価 798円

「日本の山はなぜ美しいか」の自然科学的特徴と成り立ちを登山者のためにわかりやすく説明しようという意図の本である。

著者の研究の特色は、風や雪、植物、地形や地質の要素に分けずに、そのつながりを明らかにして、全体の景観の形を把握するという。これは、われわれ山好きには理解しやすいかもしれない。

まず、日本の山の美しさの原点は自然の多様性にあるという。強風、多雪、豊富な残雪、森林、複雑な地質、たくさんの火山(深田百名山の半数以上が火山!)、ハイマツと高山植物の相互作用など、ヨーロッパを対比させながら特徴を説明する。日本の高山にないのは氷河だけ。納得! 地質と地形の違いによる植生分布の違い、これも納得がいく。

しかし、本書の後半からはじま

る地質、山の成り立ちと地形の項からは、私のようなフツウの山好きには突然、難解になる。プレートテクトニクスによる説明は一応理解したつもりでも「単純ではないプレート運動」の迷路に導かれる。加えて、岩塊斜面、付加体、ペディメントとペディプレーンなどの耳慣れない専門用語が頻出して戸惑ってしまう。

大陸衝突、浸食、氷河や対馬暖流、火山活動などが影響しあって日本の山脈が出来上がり、アルプスなどと比べて複雑で特異な植物分布になったと理解したつもりだが……。これらを楽しみながら知るためには、著者が主宰する「山の自然学」や「ジオエコツアー」に参加して、フィールドに出て「自然のつながり」として地質や地形を学ぶのが早道と感じた。

また、本書は新書判とはいえ、日本列島の複雑きわまりない地質分布やプレートテクトニクスによる山脈の成因図など、ふんだんに鮮明な写真と図版が使われていて理解を助ける。フィールド・ガイドとして山に携えていくのもよいだろう。

(松澤節夫)

図書受入報告 (2009年11月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
粕谷昭二	恵みの山 鳥海山	391p/18cm	東北出版企画	2009	著者寄贈
長沖通	新・尾瀬讃歌	78p/13×19cm	長沖通(私家版)	2009	著者寄贈
近藤信行(編)	山の名著——明治・大正・昭和戦前編	271p/22cm	自由国民社	2009	大森久雄氏寄贈
拓殖大学70年史写真集発行委員会(編)	拓殖大学山岳部70年史——写真で見る山岳部の光跡	151p/30cm	拓殖大学岳友会	2009	発行者寄贈
本多勝一	初めての山へ60年後に	221p/22cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
浜田優	流れる山の情景	159p/20cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
平山三男	疲労凍死 天幕の話(山溪叢書 No.4)	415p/19cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
大野秀樹	登山は元氣を与えてくれる総合芸術——登山は少子化を救うかもしれない	163p/21cm	ナツプ	2009	著者寄贈
細川舜司	日本の「分水嶺」をゆく——単独初踏破の全記録 本州縦断2797キロ	301p/22cm	新樹社	2009	著者寄贈
服部文祥	狩猟サバイバル	267p/20cm	みすず書房	2009	著者寄贈
Neo Printech Co.Ltd. (ed.)	韓国 國立公園(写真集)	119p/26cm	國立公園管理公團	2007	李仁禎氏寄贈
Richard Sale	Mapping the Himalayas—Michael Ward & The Pundit Legacy	208p/25cm	Carreg	2009	中村保氏寄贈

追

OBITUARY

悼

松丸秀夫さんを悼む

藤本慶光

名誉会員の松丸さんが2009年10月18日に亡くなられた。

94歳5カ月のご長命であった。日本山岳会には1949年に藤井運平さん、村山雅美さんの紹介で入会され、1996年に名誉会員に推挙された。自然保護委員会、科学委員会で長く活躍され、百年史編纂委員会のメンバーでもあった。同好会では、アルパインスキークラブ、アルパインスケッチクラブ、アルパインフォトビデオクラブ、緑爽会、サン燦会など多く



松丸秀夫 (まつまる・ひでお)

1915年5月生まれ。
1938年、東京帝国大学薬学部入学、スキー山岳部に所属。
1949年、日本山岳会に入会。会員番号3503。
1955年より1974年まで(途中中断をはさみ)『山日記』の編集に携わる。
1990年より百年史編纂委員会のメンバーとして尽力。
1996年、日本山岳会名誉会員に推挙される。

の同好会に入られて、長年にわたって積極的に活動に参加された。

90歳を超えてもこれらの会合に参加するためにしばしばルームに顔を出された。小さなサブザックを背中に背負って市ヶ谷の坂をゆっくり登っておられる後姿をよくお見かけした。

松丸さんの山岳会の活動で特筆されるのは、『山日記』の編集に長く携わってこられたことだ。「赤い表紙の山日記」として広く岳人に愛用された『山日記』が廃刊されて久しく、なじみも薄くなったが、松丸さんは20年近くこの編集にか

かわっておられた。

2005年11月3日に行なわれた連続講演会「語り継ぐ黎明期の登山」の第5回目の講師として「山日記から見えてくる日本山岳会」と題して講演をされた。古い山日記のページを丹念にスライドに映し出し、分厚いメモを用意されて実に緻密な内容の話をされた。次のスライドを促す、「次、お願いいたします」というおだやかな声の音色が耳に残る。松方三郎さんの巻頭言、「山に登る人々のために」の長さがだんだん短くなっていき、ついになくなってしまうことにふれて、日本山岳会が持っていたロマンチズムに満ちたアルピニズムはなくなつたと、静かにしかし厳然と言われた。これからの日本山岳会がどのように進んでいくのかについての松丸さんの意見がもう聞けないのは淋しい。

『山日記』に関しては『日本山岳会百年史』に五十嶋会員が松丸さんの指導を得て、「山日記五十三巻の足跡」を書いておられるので、ぜひお読みいただきたい。

委員会の会合などでは静かに座ってみんなの議論を聞いておられたが、求められたときはご自分の

意見をはっきり述べられた。お酒を一滴も飲まないのに、二次会にも出られて談笑に加わっておられた。

アルパインスキークラブでは、雪崩についての原書をみんなで翻訳したり、グラスファイバーのスキーを自分で作って披露されたりした。スケッチクラブでも若い方に教わりながら、お人柄をよく示すおだやかなスケッチをなさった。来年2月のクラブの展示会で遺作が展示される予定だ。

松丸さんは東京大学で、スキー山岳部に入られて山登りをされた。1959年の秋、ときならぬ台風の襲来で新雪の穂高岳滝谷で東大スキー山岳部は6人の仲間を失った。この遭難について、ご自分の在学中に谷川岳で同じような天候のもとで2人の仲間を失った遭難の経験が生かされなかったことを大変悔やまれ、今年の東大山の会の会報にこれについての一文を寄せられたが、これがおそらく松丸さんがまとめた文章を書かれた最後だろう。

奇しくも50年前の滝谷の遭難と同じ日に亡くなられた。心からご冥福をお祈りしたい。



平成21年度第7回(11月度)理事会
日時 平成21年11月11日 18時30分～20時30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野澤・谷川・永田・萩原各理事、平井監事、近藤・酒井・森各常任評議員

【委任】 中山理事・深川監事

【審議事項】

1・顧問契約(案、10月からの継続審議) (岡部)

新法人への移行作業手続きを適切・円滑に行なうため、専門知識を有し、かつ移行実務経験者による指導・助言を得る委託先の人選を進めてきた。その結果、会員吉川正幸氏(No.7345、公認会計士)が総括代表社員である「太陽

ASG有限責任監査法人」に依頼することになり、同監査法人と新法人移行の会計処理および財務書類の調整等に関する業務契約書(案、いわゆる顧問契約)を締結したい。

(承認)

2・会員管理システムの導入(永田)

現行会員管理システムは導入後相当の年月が経過している。万全なバックアップ体制の構築、正確性、融通性、安全性の向上を図り、かつ作業効率を高めるため新たな会員管理システムを導入したい。

新システムは「SaaS(Software as a Service)」と呼ばれるもので、本年12月に設計開発に着手、新旧システムの並行運用期間を経て平成22年4月には本番稼働を見込む。初期費用100万円、その後の年間費用は42万円を見込む。

(承認)

3・秩父宮記念山岳賞(宮崎)

10月15日に秩父宮記念山岳賞審査委員会が開催され、今年度の受賞は馬場勝嘉会員(No.2674、永年会員)。同会員の著書『ヒマラヤ登山記録集』第1巻および第2巻が、審査委員全員一致で推薦された。

(承認)

【報告事項】

1・プロジェクトチーム報告(藤本、神崎、尾上、成川)

法人改革対応検討プロジェクトチーム(以下、PT)、支部活性化PT、JAC-YOUTH PT、および山の目制定PTの活動・取り組み状況について詳細な報告が行なわれた。

2・評議員会(名誉会員推薦)(宮崎)

10月24日に開催され、本会前会長宮下秀樹氏が推薦された。

3・新入会員オリエンテーション(宮崎)

11月7日に開催され、35名の新会員が参加した。翌日の高尾山記念山行には16名が参加した。

4・第25回支部懇談会(尾上)

10月25日、26日福島支部主管で

盛大に開催され、約150名が参加した。雨天のなか、懇親山行(磐梯山、猫魔ヶ岳)が実施された。

5・九州5支部懇談会(岡部)

11月7日、8日、筋湯温泉(大分県)で開催され、約40名が参加した。

6・房総半島分水嶺踏査報告(神崎)

千葉支部では房総半島の分水嶺踏査を10月11日から開始した。踏査期間は、約1年半を予定している。

7・実験用小型発電機施設設置の期間延長許可(文化庁)(太田)

去る7月10日付で申請をしていたが、文化庁から許可があった(9月25日付、これを受け長野県から10月19日付で許可通知があった)。

8・第46回学生部マラソン大会(相馬)

恒例のマラソン大会は10月11日に行なわれ、13チーム(1チーム4名)が参加した。

9・会報『山』11月号編集報告(神長)

ルイム日誌

11月

19日	科学委員会 指導委員会 アルパインフォトビデオク ラブ
20日	学生部 支部活性化プロジ エクト 01会
21日	SUN燦会
24日	総務委員会 会報編集委員 会 集会委員会 千葉支部
25日	ゆきわり会 海外委員会 総務委員会 自然保護委員会 定款検討 委員会 麗山会
26日	総務委員会 図書管理委員 会 山遊会
27日	総務委員会 山の日プロジ エクト
30日	総務委員会 11月来室者623名
12日	図書委員会 山の自然学研 究会 アルパインスキーク ラブ
13日	高尾の森づくりの会
14日	会報編集委員会 指導委員 会
16日	総務委員会 資料映像委員 会 00会
17日	山岳研究所運営委員会 ア ルパインスケッチクラブ アルパインスキークラブ JACユースプロジェクト 三水会 つくも会
18日	
2日	アルパインスキークラブ
4日	常務理事会 集会委員会 山岳地理クラブ
5日	総務委員会 アルパインフ ォトビデオクラブ みちの り山の会
6日	総務委員会 九五会
7日	新入会員オリエンテーショ ン
9日	集会委員会 アルパインス キークラブ 高尾の森づく りの会
10日	アルパインスケッチクラブ
11日	理事会 山想倶楽部 休山 会

会員異動（11月）

物故

福原健司（4535） 09・11・11

退会

遠藤光男（6862）

山瀬一裕（10122）

宮川ふみ江（11423） 京都

原田道雄（11656） 京都

中村正勝（12504） 信濃

◆冬山気象情報

2008年末、09年ゴールデンウィークに続き、09年末も冬山天気予報をインターネット、携帯電話で配信いたします。

すでに冬山天気予報で登録された方は、再登録の必要はありません。配信を希望されない方のみ、左記のサイトより登録の解除をお願い致します。天気予報は、株式会社メテオテック・ラボのご協力により、気象予報士が天気予報を毎日発信します。

パソコン版とメール配信版の2通りで、登山中も携帯メールで天気予報を受け取ることができます。利用は無料。日本山岳会会員以外でも利用可能です。

【JAC天気予報 登録・解除 ホームページ】

<http://www.everest.co.jp/jacweather/>

期間 12月18日～2010年1月

インフォメーション



17日

山城 ①北ア北部（剣・立山） ②

北ア南部（槍・穂高） ③八ヶ岳

なお、試験運用は、情報配信の技術的試験を行なうものであり、本天気予報の結果、およびその利用に伴い生じるいかなる問題についても当会は、責任を持ちものではありません。



■訂正とお詫び

7月（770）号、17ページ新入会員の田中國興（14624）住所の「清瀬市」は「愛知県清須市」の誤りでした。

11月（774）号、19ページ集会委員会の表で平成「21年度」が「22年度」、8月「千丈ヶ岳」が「仙丈ヶ岳」、10月「天飾山」が「雨飾山」の誤りです。

ともに訂正してお詫びします。

早池峰山岳博物館

岩手県花巻市大迫町大迫 3-39

TEL & FAX 0198-48-3020



山の博物館訪問



入館料 大学生・一般200円 (150円)

小・中・高校生100円 (50円)

* () 内は20名以上の団体料金

開館時間 9:00~16:30

休館日 月曜日(祝・休日の場合は翌日)

年末年始 (12月29日~1月3日)

交通機関 バス=盛岡バスセンターより大迫・大船渡行き50分。東北本線石鳥谷駅より大迫行き30分。徒歩=岩手県交通大迫バスターミナルより5分。新幹線=花巻駅より車で30分。飛行機=いわて花巻空港より車で30分。自動車=東北自動車道、花巻インターより35分。

—花がとりもつ縁で国際交流記念館として発足した山岳博物館—

早池峰山岳博物館の前の名称は、大迫町立山岳博物館です。平成18年に大迫は隣接の3町とともに花巻市と合併し、花巻市となったために館名も変更になりました。

前大迫町は昭和40年に大迫町等に位置する北上山地の主峰、「町の花」でもありました早池峰山の固有種ハヤチネウスユキソウと欧州アルプスの名花エーデルワイスが類似花という縁で、オーストリアのベルンドルフ市と友好都市の締結をし親善交流を始めました。日本の東北の山間の小さな町が世界と、当面するあらゆる困難を克服し、より高い理想を追い求めるアルピニズムの精神をもってまじわりを始めたのです。

本館は友好都市の締結を記念し、1971(昭和46)年に、町のほぼ中央の地を「ベルンドルフの丘」と命名し、ベルンドルフ市より若い女性建築家を招き、オーストリアの山岳地方の民家を模し、ベルンドルフ記念館「大迫町立山岳博物館」として建設したものです。したがって建物自体も資料です。

館内にはベルンドルフ市との親善交流記念品とともに、早池峰山を主峰とする早池峰山城を中心にした高山植物・動物剥製・岩石等の自然と、早池峰信仰事跡等の写真・文献等の歴史資料、そして日本、世界のピッケル・登山靴等の歴史的登山用具、スキー用具、山岳関係団体の機関紙・山岳関係文学書等文献を限られたスペースではありますが可能な限り展示してあります。

前大迫町がアルピニズムの精神をもって世界に開かれた町を志向し、ベルンドルフ市と友好都市を締結し親善交流をしてきた趣旨、日本・世界の登山、スキー用具の変遷、そして世界の遺産ともいべき早池峰の自然、伝統文化を守り後世に伝えるべく取り組んでいる姿を、小さな小さな博物館ではありますが本館よりお汲み取りいただければ幸いです。ベルンドルフ市との友好都市締結は、花巻市になっても再締結されております。

◆編集後記◆

●12月恒例の年次晩餐会も盛況のうちに終わりました。今回は新入会員の山田さんの話に注目、あいさつの全文を収録させてもらいました。それにしても多数の会員が集まる晩餐会、総務委員会のみなさんのご苦勞は大変なものだと思います。ほんとうにご苦勞さまでした。

●会報は、会員のみなさんの活動とその報告でできています。毎月、寄稿してくださる会員の方にはほんとうに感謝しています。ひとつひとつにお返事ができず、申し訳ありません。この場を借りて非礼をお詫びいたします。そして今年も12月号の編集を終えました。ちよつとほつとしていきます。ありがとうございます。どうぞよい年をお迎えください。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 775号

2009年(平成21年)12月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上 昇

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社